【土木計画学研究・講演集　No.22(2)　1999年10月】

江戸繁華街における回遊行動～『斎藤月岑日記』を対象に～

The excursion in the amusement area of Edo ~From the diary of Gesshin Saito ~

藤井夕貴子*，天野光一**
Yukiko Fujii, Koichi Amano

1．はじめに

「江戸」という都市は、“花のお江戸”といわれていたように、多くの人のエネルギーが集まる都市であり、文化の繁栄・商業の発達が急激な勢いで起きていた。その結果、江戸庶民の活気にあふれ、アメニティーレベルの高い都市が形成された。そのような都市の性質を最も顕著に表していたのが繁華街[1]の存在である。この時代には、人々の集まる所、江戸文化が育まれる所として、多種多様な繁華街が成立したのである。

では、江戸において庶民は実際にどのような行動をとっていたのであろうか。本研究では、町名主斎藤月岑に着目し、彼の行動を読み解いていくことで、江戸の活気・アメニティーレベルの高さの解明につなげたいと考えている。

2．対象

本研究では、『江戸名所図会[2]』の作者であり、文化人としても名高い江戸の町名主斎藤月岑という人物に注目した。

月岑は、『斎藤月岑日記』という約４５年間(1830～1875)にわたる日記を書き残しており、その中から、本研究の対象地である繁華街へ向かう回遊行動のみを抽出し、本研究の資料とした。また、本研究の対象地域としては、斎藤月岑が実際に行動した全地域とする。(江戸四宿[3]で囲まれた地域と隅田川東岸部を合わせた地域に相当)

斉藤月岑という人物は、江戸案内本として当時の人々に親しまれていた『江戸名所図会』を編纂した人物である。月岑は、江戸に関する豊富な知識と経験を持ち、江戸庶民の行動を把握していたと考えられる。また、月岑のとる行動は広範囲に及び、江戸に暮らす一般庶民の様々な行動パターンを広く反映していたと考えてよい。そのため、月岑日記は、江戸庶民レベルの日常的な行動パターンをうかがい知るうえで、有用なデータとなり得る。

さらに、人物の行動を記してある日記が約４５年分も存在している例は他になく、とても貴重な資料であることを考え合わせると、この日記を使用することが有効であることが分かる。

3．目的

本研究では、江戸の町名主斎藤月岑を対象に、

a) 斉藤月岑が、どのような目的で・どのような繁華街へ行っていたのかを明らかにする。

b) 繁華街内、あるいは繁華街間における回遊行動を明らかにする。

4．分析方法

(1)分析視点

本研究では、『斉藤月岑日記』から、月岑の行動を読み取り、月岑が、江戸市中をどのように行動していたかを明らかにする。

ただし、本研究では、数量的分析が中心になるためと、日記内容の精度のために、各地点間の移動経路までは明らかにできていない。

(2)分析方法

a) データの抽出・整理

キーワード：土木史・江戸・斎藤月岑・回遊行動
*学生会員　東京大学大学院　新領域創成科学研究科環境学専攻
E-mail:kk96624@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp
**正会員　工博　工学系研究科社会基盤工学専攻
〒113－8656　東京都文京区本郷７－３－１　03－3812－2111

1 浅草寺周辺や不忍池周辺、両国橋付近が有名であった。
2 江戸の神社・仏閣・名所・旧跡を絵付で説明したもの
3 江戸四宿：品川宿・内藤新宿・板橋宿・千住宿

『斎藤月岑日記抄録[4]』の中から斎藤月岑の文化的活動時（参詣、祭見など）の行動を抽出する。（資料数：1600）その後、その抽出した行動を整理し直し、その情報をデータシート化する。

整理項目：目的地域・目的地（区域）・目的地（詳細）・目的地（店名）・通過地点・行動目的・飲食関係・交通 MODE・同行人・備考

b）データの集計・数量分析

データシートを利用して月岑の行動を集計する。それを利用して、項目別統計による分析（行動目的別集計・目的地域別集計）や地域間相互関係の分析を行う。地域間相互関係分析は、月岑の回遊行動回数が目立って多かった４地域（浅草・上野・両国・川向[5]地域）のみ行った。神田地域には、月岑の自宅が存在しているため、対象地域からは除外した。これら地域の資料を利用して、目的地到着以後の月岑の行動を調べ、複数地域間の相互関係の分析・考察を行う。

また、地域間のつながりを知るために、その結果を利用して、地域間クロス表を作成する。

C）経路選択パターンの分類

1600 のデータと本研究のこれまでの研究成果から、月岑の経路選択パターンの分類を行った。（Ⅰ・Ⅱ）そして、それぞれのパターンの具体例を抽出し、考察を行う。

Ⅰ 目的地域内回遊行動→浅草・上野・両国地域

Ⅱ 複数目的地域回遊行動

浅草地域―上野地域、浅草地域―両国地域、浅草地域―川向地域

5．分析結果

（1）項目別統計による分析結果

a）行動目的集計結果

本研究では、行動目的地を聖領域と俗領域に分類して考察を進めた。その集計結果をまとめたものが図１である。

聖領域への行動は、寺社と関係している行動をまとめたものである。その中では、参詣が圧倒的に多く、資料も 1000 近く抽出できた。

[4] 西山松之助編　東京大学史料編纂所蔵

俗領域への行動は、現代の私たちの感覚では“遊ぶこと”にあたる。図１の円グラフでも分かるように、月岑は江戸時代における多種多様な遊びを経験していた。

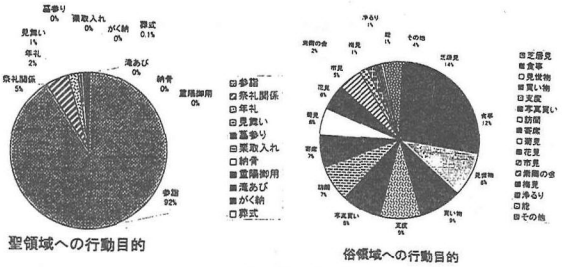

図１　行動目的集計表

b）回遊行動回数集計結果

月岑は、浅草・虎ノ門・神田・上野・両国・川向地域への回遊行動回数が多い。特に浅草は突出している。この時代に盛り場として有名であった場所（浅草奥山・両国橋界隈・上野山下・深川八幡など）と一致していることがわかる。

ここで特筆すべきは、大川[6]の東側地域、向島・本所・深川地域への回遊行動数である。これら３地域を合計すると、約１００回にもなる。それぞれの値は目立たないが、３地域まとめてとらえると繁華街に匹敵する。この３地域は、大川の東側に位置するため、

①これらの３地域へ移動するには、大川を横断しなければならない。当時は、その手段に関わらず、川を渡るという行為が大きな意味を持っていたので、‘川を渡っていく地域‘という意識を持つことで同地域とみなす傾向が存在したと考えられる。

②大川による江戸中心地との空間的・文化的分離という共通点を持っていたので、つながりは強かったと考えられるので、ひとまとめにすることが可能である。そこで、本研究では川向地域としてひとまとめで考察した。

回遊行動回数が多かったいくつかの地域の中で、虎ノ門地域への回遊行動要因は分からなかった。そのため、本研究の地域間相互関係の考察対象からは除外した。

[5] 本所・亀戸・深川地域の総称

[6] 現在の隅田川

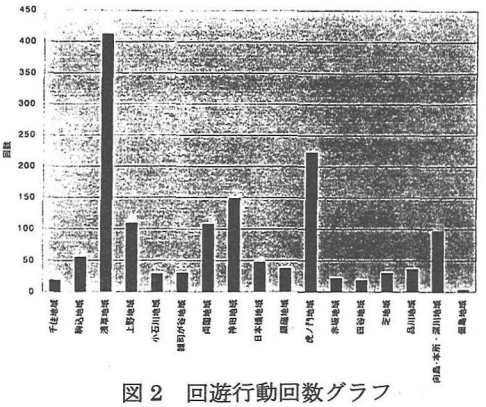

図２　回遊行動回数グラフ

（２）地域間相互関係分析結果

（１）（ｂ）の分析結果をもとにして、月岑の回遊行動回数の多かった４地域間を対象に、地域間クロス表を作成した。

地域＼地域	浅草	上野	両国	川向
浅草	１２７			
上野	５４	６８		
両国	２６	２	９	
川向	５３	３	３４	２７

図３　地域間回遊行動クロス表

この表から、Ⅰ同地域内での回遊行動と、Ⅱ複数の地域間にまたがった回遊行動が存在することがわかる。そこで、Ⅰを目的地域内回遊行動、Ⅱを複数目的地域回遊行動と名前を付け、それぞれについて考察していく。

Ⅰ目的地域内回遊行動

この経路選択パターンは、表１のクロス表からも分かるように、ある目的地に到着した後の移動は、同地域内で行われる確率が大きいことがわかる。特に，浅草地域・上野地域はその傾向が顕著であり、その回数は全体の約半分を占めている。

a）浅草地域内回遊行動

江戸において、浅草は盛り場として最も栄えていた地域であり、月岑が頻繁に足を運んでいたのも納得できる。

＊回遊行動に影響を与えていた浅草地域の特徴

①真土山（＝待乳山）の影響力

浅草地域の象徴が真土山であった。そのため、浅草へ行くときは、真土山を起点として行動することが習慣であった。

②繁華街として発達していたこと

多数の行動拠点が存在していた。代表例としては、浅草寺内奥山（多目的娯楽空間）、猿若芝居町（芝居小屋区域）、今戸（料理屋密集区域）、吉原遊郭などがある。

これらの要因を併せて考えると、月岑の浅草地域内における回遊行動の代表的なパターンを抽出することができた。

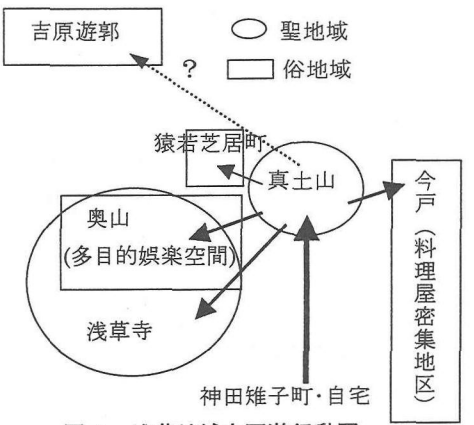

図４　浅草地域内回遊行動図

b）上野地域内回遊行動

上野は寛永寺の門前に開けた盛り場で、浅草と同様に繁華街として有名な場所であった。しかし、地域内での月岑の回遊行動の仕方が明らかに浅草地域内の行動とは違っていた。

＊回遊行動に影響を与えていた上野地域の特徴

上野地域内での回遊行動は、必ず決まった蕎麦屋で締めくくられていた。また、その蕎麦屋は、目的地によって、決められていた。

（池の端→蓮玉庵、入谷→松下亭、千太木→紫泉亭）

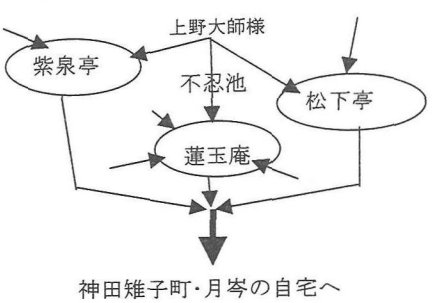

図５　上野地域内回遊行動図

c）両国地域内回遊行動

両国地域内の回遊行動の場合、回向院の存在は欠

かせないことが、抽出したデータから分かる。毎回、回向院に参詣しているわけではないが、回向院を見ることができる範囲内で行動をしていた。

＊回遊行動に影響を与えていた両国地域の特徴

①回向院の存在の大きさ

この時代における回向院は、浅草寺・寛永寺などと並ぶ寺院であった。

②柳橋のたもとや回向院の周辺など、食事処は限られていた。

③繁華街として有名であった両国橋の存在も大きかった。また、回向院・柳橋・両国橋間距離を考えると、この地域内での回遊行動は、狭い範囲内で行われていたことがわかる。

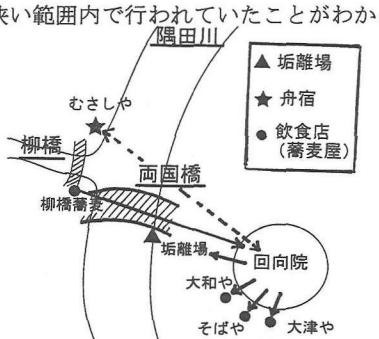

図６　両国地域内回遊行動

Ⅱ複数目的地域回遊行動

月岑の行動には、いくつか特徴的なものが存在していることが分かる。それらの中で、代表的なものを選び、考察を行う。

a)上野地域→浅草地域

月岑は神田にある自宅を出た後、神田地域の北にある上野地域へ寄り、その後浅草地域へ向かう、という行動パターンが多く見られた。

このような行動の要因として私が考えたのは、『江戸名所図会』の挿絵を描いている長谷川雪旦の存在と、自宅のある神田と浅草の間にあるため、浅草に行く途中で食事を取ることが多かったのではないか、ということである。

b）浅草地域→両国地域

月岑には神田にある自宅から、浅草に向かい、そこで参詣を済ませた後、両国へ寄り、食事や見世物見物などを行い、一日の締めくくりを行う、という習慣があったようである。

遠回りをしても、両国に寄る理由として、私は、両国橋からの眺めや、両国界隈の盛り場としての賑わい、船宿柳橋むさしやの存在などを考えたが、日記には書かれていなかった。

c）浅草地域→川向地域（向島・本所・深川）→両国地域

神田の自宅を出発し、浅草地域・川向地域・両国地域と移動していくこの行動は、まさに回遊行動である。江戸の繁華街を網羅した行動であり、様々な遊びの要素が含まれていたと考えられる。

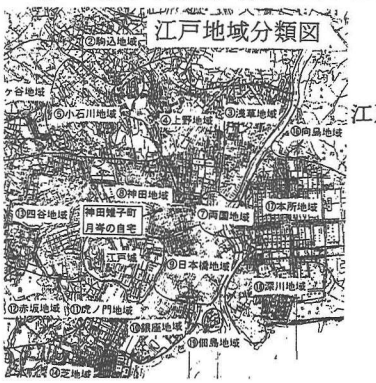

図７
江戸地域分類図

６．結論と今後の課題

(１)結論

a）斎藤月岑の回遊行動の傾向を数量的に分析することができた。

b）繁華街における斎藤月岑の典型的な回遊行動パターンを抽出することができた。

(２)今後の課題

a)京都、大坂などについても同様に繁華街の回遊行動の研究を行い、今回の江戸における研究と比較する。

b)時代設定を変えて大正～昭和にかけての東京における回遊行動を研究し、回遊行動には時間に伴う変化が存在するかを検討する。

参考文献

1) 斎藤月岑著『斎藤月岑日記抄録』東京教育大学文学部「史学研究」第 71 号

2) 西山松之助著『江戸町人の研究 1,4,5』吉川弘文館

3) 小木新造編『江戸とは何か 5 江戸東京学』至文堂

4) 小木新造他編『江戸東京学事典』三省堂　1987

5) 『国史大辞典 6』吉川弘文館

6) 児玉幸多監修『復元・江戸情報地図 1:6500』朝日新聞社　1994

7) 海野弘著『江戸の盛り場』青土社　1995